

オスマントルコ帝国の残照を感じる街

まちあるきの考古学

ブルサ – Brusa –

オスマン帝国の古都 街全体が世界遺産

高石垣の砦跡から見るブルサの街並み

イスタンブールからバスに揺られること約2時間、オスマン帝国の古都ブルサに着きます。人口200万人を超すトルコ第4の大都市ですが、帝国の残照を強く感じる街でもあります。

ここは、1326年から46年間、オスマン帝国の首都でした。その後、欧州のエディルネ、そしてイスタンブールへと帝国首都は移りますが、オスマン1世をはじめとする帝国初期5代のスルタン(君主)霊廟など、数々の歴史遺産が残り、オスマン様式の建築物の建ち並ぶ美しい街並みは、いまでも訪れる人を魅了しています。

高石垣の砦跡からは、4～5階建て寄棟造の集合住宅の朱色の瓦屋根が連なり、その合間に木々の緑が映える、とても美しい街並みを望むことができます。

宿泊先はウル・ジャーミイ(街のメインモスク)のちょうど道路向かいでした。夜明け前に始まる、人々に礼拝を促すアザーンは、無視して眠り続けることのできないほどの大音量で、町中に鳴り響きわたります。

ウル・ジャーミイは、1399年に完成した初期オスマン時代のモスクです。イスタンブールのモスクとは違い、当時は同型のドームを並べた形状のものが一般的だったようで、20個のドーム型(円形天井)の構造から成るセルジューク朝様式のモスクです。



スルタン霊廟のある砦跡

ウル・ジャーミイ(街のメインモスク)

モスク(ジャーミイ)の神々しさ、美しさ、そして畏敬の念
それを全身で感じるために、僕はブルサに来たのかも知れない。



イエシル・ジャーミイ

トルコ石を敷き詰めたような美しいタイル

ブルサの街は“イエシル・ブルサ”(緑のブルサ)と呼ばれます。
そのシンボルがメフメト1世の建築したこのモスクです。
内部を飾るタイルは、トルコ石のような澄んだ空色、スカイ・ブルー。トルコ語の“イエシル”は、樹々の緑から明るい青までを含めた広範な青を意味するようです。



ウル・ジャーミイ

1399年に完成した初期オスマン時代のモスク

ドーム天井から降り注ぐ光は神々しく、照らされた泉は清らかな水を湛えています。
白漆喰塗りの壁面には上品で優美なラインが描かれ、壁面は絵画のように美しいカリグラフィーで飾られます。
それはまるで、美術館のようなモスクでした。



ジュマールクズク

オスマン朝様式の木造家屋と伝統的農村風景を残す世界遺産

オスマン朝様式の木造家屋

1階は木材を組み合わせた石積みで組み上げ、2階には肘木を使った出桁造の木造家屋に寄棟造の瓦屋根。漆喰塗りの外壁に着色された朱色が、この街の色彩基本コードのようです。轍の目立つ風雪に耐えた石畳みに、時の流れを感じます。



突然の世界遺産登録

ジュマールクズクには、ブルサ中心部からミニバスで1時間ほど。ミニバスの乗車場がよく分からず、路線バスの運転手や道端のご老人に聞きまくった末、半日かけて何とかたどり着きました。村の入口には世界遺産の石碑。世界遺産登録とともに、欧米人旅行者が殺到したようで、バス停前に並ぶ急ごしらえのお土産物屋さん、そして、観光客にまだ慣れていない様子の店員さんが微笑ましかったです。



少しマニアなブルサの地理

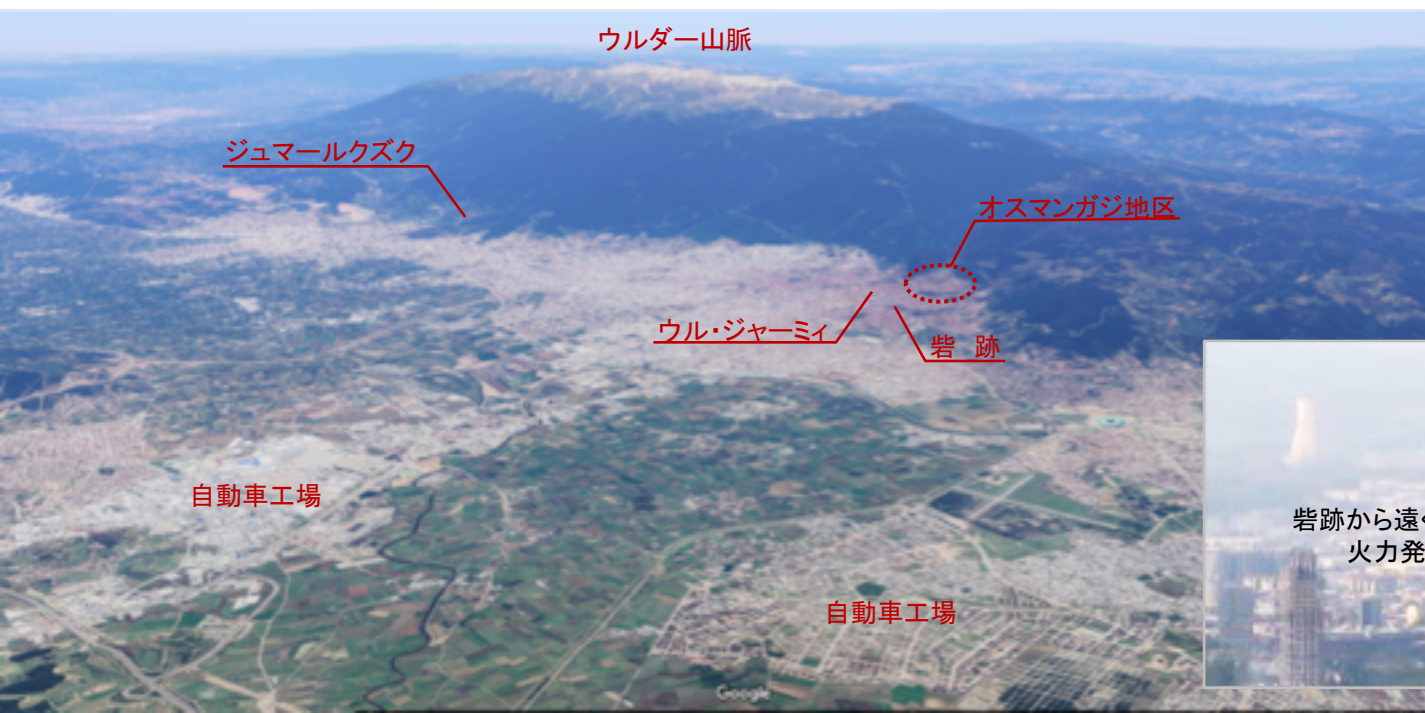
ブルサは、標高2500メートルを超えるウルダー山脈の北麓に広がっています。

広大な盆地を見下ろように高石垣の砦跡が残り、そこにオスマン帝国の初期スルタンの霊廟があります。

地形は複雑で、扇状地と山体崩壊が組み合わさったように見えます。

砦に守られるように、その上の急斜面にオスマンガジ地区と呼ばれる旧集落が広がっています。ここがブルサ発祥の地のようです。

ブルサの街は、ここから北麓の盆地平野に大きく発展したようです。



砦跡から見下ろせる広大な盆地平野には、ブルサの都市発展の象徴といえる施設が2つ見えます。

ひとつは、自動車工場です。1970年代にトルコ政府が自動車産業を育成するため、ルノーとフィアットの工場を誘致したもので、多くの部品メーカーと相まって自動車産業集積地となっています。



もうひとつは、日本の資金提供により建設された火力発電所です。2棟の白い巨大なタービンサイロが印象的で、熱源の天然ガスは、ロシアから黒海パイプラインを通して供給されているそうです。

[まちあるきの考古学](#)